

水都大阪の再生

～環境先進都市とアクアツーリズム～

大阪府立大学教授 橋爪 紳也

本日は、イタリア、東京の事例に続きまして、大阪の話をいたします。少し私の現在実践していることなどをご報告させて頂きたいと思っております。

大阪の次世代型のツーリズム

今からお話する事柄は、現在大阪で進行している、全て私がプロデューサー、あるいは企画のデザインを中心となって動かさせて頂いております事業です。

私は大阪府橋下徹知事の政策アドバイザーをしておりまして、大阪の町すべてがミュージアムだということで、「大阪ミュージアム構想」という活動をしております。また大阪市とともに町歩き観光を徹底しようと、「大阪あそ歩」というプログラムも現在進めております。3 ヶ年で300 コース、大阪市内の全てに町歩きのルートをつくらう。それを市民のガイドが案内をするというプログラムです。また大阪商工会議所で行っておりますご当地検定の「なにわなんでも大阪検定」というものがあります。この名前の付け方が大阪らしいとよく言われておりますが、今年初回を行いまして、5800 人の方に受けて頂きました。

すべてわが町の魅力を再発見し、市民自らがわが町のことを案内し、地域の歴史文化・さらには新しい風景を広く知らしめる。先程石森先生がおっしゃった“次世代型ツーリズム”の大阪的な展開をこれまで考え、実践しております。

もうひとつが、今年進めております「水都大阪 2009」というプログラムです。私は、そのプロデューサーも務めております。

大阪と水辺、アクアツーリズムと申しますと、誰もが道頓堀のグリコのネオン看板を思い出すのではないのでしょうか。あるいは法善寺横丁の水掛不動ですね。余談ですが、中国の人には水掛不動がとて珍らしいようです。いつも水を掛けて苔が生している仏像は、世界でも見たことがないと言われます。しかし、ああいうものは日本的で非常に珍しい風物ですが、世界の人がそれを独特だと思っておられるとことを、我々はあまり意識していない、ということもあります。

しかし、そういう従来大阪だけでは駄目ですので、大阪の魅力をもう一度「水」と「光」という言葉に集約して再発信をしていこうとしております。

今知事がよく使われる言葉に、「空気感」というものがあります。その町の写真 1 枚を見て、憧れて、行ってみたいと思うビジュアルを、世界の素晴らしい地域はそれぞれ持っている。それに対して我が大阪はどうか。道頓堀のグリコのネオンサインも大阪らしいものですが、それだけでは駄目だ。もっ



と上質で洗練された水辺の景色や、夜の景色が大阪にはあることをこれからはアピールして行きたい。そこで我々は、「水都大阪」というプログラムを進めております。

ツーリズムというのは、広く人が移動することで地域がよくなる、地域の方々が幸福に暮らしていけるようになるものです。人が移動すればするほどよくなる社会を、我々は目指していきべきだと思います。私はこの水都大阪に、従来忘れられていた水路に人々を移動させたい。そこで何らかの経験をする事で、本当に地域がよくなって欲しいという思いを込めました。これがアクアツーリズムのひとつの大事な論点ではないかと思えます。

都市の物語の描き方

次に、推定昭和 40 年頃の大阪都心部の話をします。私の生まれた家から歩いて 30 秒のところに東横堀川という川がありました。上流から汚いものが色々と流れてまいりまして、川底から色々なものが湧いてきまして、異臭漂う非常に汚い川でした。ただ各建物の間に、川縁まで下りる場所がありました。こういう場所を、我々が子どもの時は秘密基地として遊んでいました。現在はここに堤防がずっと出来まして、徐々に川は綺麗になりつつありますが、我々の暮らしている町と水辺の境目には近づけなくなっております。堤防で区切られた川で、我々は育つて参りました。



ところが 80~100 年ほど遡りますと、大阪は縦横に水路が張り巡らされていた、まさに運河の町でありました。大阪は元々低湿地に出来た町ですので、物を運ぶための川ではなくて、水はけをよくするために、縦横に堀を抜きました。その堀を掘った時の土を両側に盛り立てて、城下町を建設した。本当に大阪城の横まで全部海だった。そこに、人間の力でまさに海に浮かぶように町を作ってきた。結果として運河網が都心部に残されて参りました。

この大阪をかつてどのように呼んでいたのか。「水都」という言い方を始めたのが、明治 30 年代の後半です。その時、何故大阪を「水の都」と呼んだのかといいますと、ベネツィアと比肩できるような都市であったからです。大阪は東洋のベネツィアという言われ方をしていました。

先日、大阪にタイ国の工業大臣をご案内して、大阪の歴史・文化を説明しておりました。「大阪はかつて東洋のベネツィアと呼ばれた」という話をしたところ、「東洋のベネツィアはバンコクである。何を言っているんだ」と叱られました。また、こういう話を堺の人にしますと「東洋のベネツィアとは堺だ。中世の時に宣教師が言っている。君らはたかだか 100 年前だ」という話も出てきます。それでも大阪は、東洋のベネツィアと呼ばれていました。

また大正時代、大阪はパリを目指して水辺を作りました。東洋のパリであります。昭和になると、今度はビルディングができて来まして、日本のニューヨーク、シカゴとなりました。このように同じ水際の風景、水の都でも世界と比べる町というのは、きわめて短期間で変わって来ました。同時に海の方で

は工業地帯が出来ましたので、東洋のマンチェスターという呼ばれ方もされています。ベネツィアなのかパリなのかニューヨークなのかマンチェスターなのか。各時代の世界のある種のカテゴリの中で、我々は比較して語るということをしばしば行います。大阪は東洋のベネツィアだったという水の都の物語を自ら発展させて、パリの的なもの、ニューヨーク・シカゴ的なものを取り入れて、大阪にしかない水の都を作りました。これが明治 30 年代から昭和初期の間の大阪の物語の作り方だったのです。



大阪はその時「我が大阪は水の都『水都』だ。江戸時代以来『天下の台所』と呼ばれて、日本各地を船で結んでいた一大港湾都市として、我々はかつてから水の都だった」と言い出しました。本当は明治 30 年代にベネツィアをモデルとして水の都の物語が始まったのですが、大昔まで戻ってもう一度物語を組み替えて語っています。私は都市の物語、地域の物語というのはそういうものだと思います。

それと同時に、東洋のマンチェスターと言い出した時に「煙の都」という物語も生まれました。水の都、煙の都、これは対の言葉になります。この煙の都の物語も、大正・昭和の初期に語り始めたものなのですが、大阪の人はそこでまた「我々は大昔から煙の都だった」と言います。何処まで遡ると思われませんか。仁徳天皇が高津宮から大阪を見晴らして「神の竈に立つ煙」と言ったのです。あの頃から「我々は煙の都だ。千数百年煙の都だ」というのです。

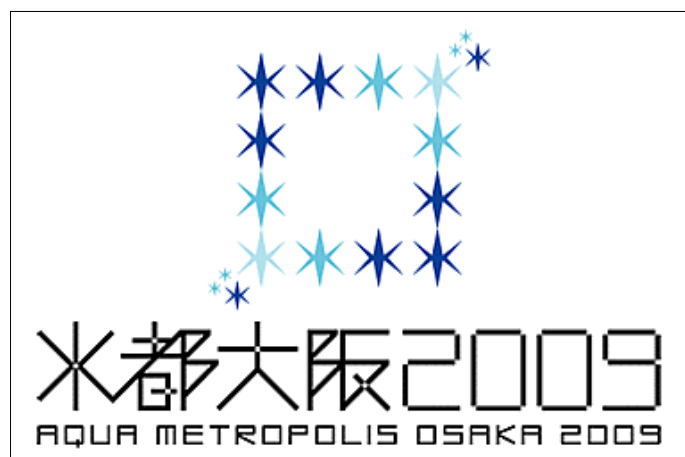
産業都市の物語を、まちづくりの歴史として語りなおす。これは冗談のように言っていますが、とても大事なことです。

杜の都仙台、花の都パリ、すべて物語は作られて、それにより町や人々の意識は変わります。外から見た憧れも変わります。「いかにわが町のことを魅力的に語るか」ということは、各地域にとっても大切なことです。元々あったものを再発見する。その時にもう一度、我々はわが町の語り方を再編集して作り上げなければいけません。

町のプライドとブランドづくり

そこで私は水の都の物語を、もう一度語り直そうと思いました。

今ヨーロッパでは「シビック・プライド」、いかに市民の誇りを魅力的なものとして、もう一度わが町が魅力的だというプライドを取り戻すのか。そういうムーブメントが、各都市のアーティストや企業経営者の中で非常に大きな流れとして生まれており



ます。

もう一点が、シティ・ブランディングとシティ・プロモーションです。いかにわが町の魅力のブランドづくりをして、対外的に発信するか。そのことも各都市が競い合っています。わが町の魅力を再発見し、美しい風景、美しい町だとアピールする。先程陣内先生がおっしゃったように、美しい風景の中で、楽しく美味しいものを食べる。そんな“当たり前の都市の魅力”の語り方を、もう一度生み出し直さなければならないと思っています。

大阪においては、この部分が非常に弱かった。我々は何十年も「大阪は美しい町である」と語ることを忘れておりました。外から観光客が来て「大阪の何処を見たらいいですか？」と聞かれた時には、「道頓堀に行って、ネオンサインを見てください」「ユニバーサルスタジオ・ジャパンに行ってください」と答える。そして「その後何処へ行けばいいですか？」と聞かれれば、「京都か神戸へ行ったらどうですか」「大阪に古いものはございません」と答えてしまう人が、大阪には多いのです。それでは駄目だろうと思います。

町のプライドとブランドづくりをするためには、ツーリズムは非常に意味があります。「水都大阪2009」のこのシンボルマークは、水が光のごとく輝いております。「水と光が、わが町の大事な風景だということをもう一度アピールし直そう」という訳です。

正方形になっております大阪都心部の多くの水路は埋め立てられました、4つの河川はまだ中心部に水路網を形作っています。シンボルマークはそのかたちを表しました。このマークに大阪の地形と地理学的なイメージと、これから進むべき方向性を託したつもりです。しかしこのイベントの告知は市民運動として展開をしたかったのですが、なかなか市民の方には認知をして頂けませんでした。そこで仕方がなく、私はポスターを作りました。水辺に注目をして頂くために、最大限の苦勞をしてみました。

水都大阪 2009 中之島のプログラム

先程も申し上げました通り、中之島という島があり、両側を2つの川が流れております。東西に川が残っておりまして、道頓堀川がそれをつないでいます。この界隈を水の回廊、あるいは大阪ではカタカナの口に似ているので「ロの字」と呼ぶようになりました。今回は中之島公園が再整備されまして、その周辺で市民参加のプログラムを2ヶ月ほど展開しております。新しくなった公園に、間伐材を使ってワークショップの場所をたくさん作りまして、毎日数十の「水辺に親しもう」「環境について考えよう」というプログラムを展開しています。例えば、サッカーボールやサッカーの靴のごみからアート作品を作る、というワークショップが連日数十行われています。毎日、何万人もの子ども達に来て頂き、成功しております。



また、中之島はかつて歴史的建造物が並んでおりました。今回かなり壊しましたが、中央公会堂と

いう建物はまだございます。その裏に中之島図書館という重要文化財の建物も残っております。この建物の中でも、さまざまなワークショップを展開し、シルバーウィーク5日間で、数十のプログラムを行いました。多くは子ども達に川、水辺の大切さを訴えるためのもので、NPOの方々にそれぞれの部屋で展開をして頂きました。

一方、この歴史的建造物のホールに光を投影するアート作品等も展開しております。ただしこういうものには、やはり一般の方は来て頂けません。そこで私はヤノベケンジさんというアーティストが作ったキャラクターや、道頓堀から掬い上げられたカーネル・サンダースなどを用意しました。そして一般の人にはこういう大阪らしいものもあることを話題に来て頂き、そこから「水辺が大事だ」「水資源、これから環境が大事だ」という本来のプログラムやワークショップ、展覧会にもぜひ足を運んで頂きたいと思っています。マスコミはこういうものを取り上げてくださるので、非常にありがたいです。

それから、ヤノベさんには「ラッキー・ドラゴン号」という作品も作って頂きました。ヤノベさんは、岡本太郎氏に影響を受けた作家で、チェルノブイリ原発や第五福竜丸、核兵器に対する問題意識からも作品を作られています。しかし作風は一般の方にも面白く思えるものです。このドラゴンは首を動かしながら大阪の川を走り回っております。

また今年が日本とオランダの友好記念の年であることから、一般企業の方に社会貢献事業として、オランダ人作家の作品を期間中河辺に浮かべて頂きました。例えば作った高さ9メートル、幅11メートルのアヒルの玩具があります。これが大人気で、これを見に多くの人に河辺まで来て頂いて、さまざまなワークショップで本当に我々が伝えたいことにも触れて頂きました。

この場所は大阪の都心部でも、元々人がほとんど来ない場所です。今回こういう整備しまして、子供達に「ここはこういう場所なんだ」と認識してもらうことも、とても重要なことだと思います。

知事と私はもう一点力を入れていますのが、水のまちづくりに加えて光のまちづくりです。世界で夜景に力を入れている都市のネットワークがフランスのリオンを中心にありますが、日本ではまだ大阪しか入っていません。大阪では今、毎年のように新たな夜景づくりをしていこうと、特にこの中之島周辺部の歴史的建造物に光を当てるプログラムを進めております。

また横に安藤忠雄先生を私で提案をして来た、川の水を浄化して打ち上げる噴水がありまして、それにもライトを当てています。従来はなかったような水際の美しい夜景を作っています。加えて先程申し上げた市民がガイドを行う町歩きのプログラムも、今回のイベント用に船と町歩きをセットにして展開しております。



水際の拠点・大阪

こういう水を活かした、あるいは「水の都」という町のイメージ、ブランドイメージを使った観光は、大阪では伝統的に昔から行われていました。そのことを私はもう一度皆さんにお伝えしたいと思います。

例えば江戸時代、大阪は瀬戸内海に行く船、京都から下りて来る東海道の人々、伊勢へ行く人、熊野へ行く人、全ての方向へ向かう人達が立ち寄る都市型観光の拠点でありました。川を下って大阪で船を下りた人は、大阪

で風を待ち、瀬戸内金毘羅へ行く船で西へ向かいます。西から来た人は大阪に立ち寄り、道頓堀等で芸能を楽しんでから伊勢熊野、京都、江戸へ向かいます。中継地点として、全国各藩から大阪にしばしば滞在している人達が多数おりました。

そのような色々な意味から、大阪の水際に拠点、つまり観光のセンターが出来ました。

これから明治の頃の映像をご覧頂きたいと思います。大川という大阪の都心部の川のもので、江戸京都よりもはるかに大阪の水際は素晴らしい、という絵です。

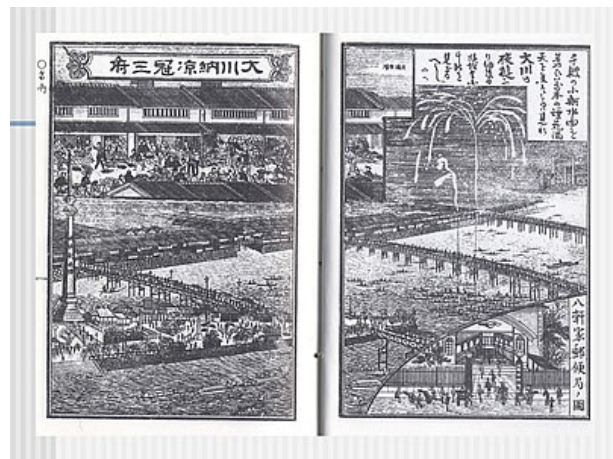
大阪会議が行われました「花外楼」という料亭等が、川岸に並んでおります。川べりに建っている建物の中から階段が出ており、川に直接出ることが出来る。そしてそこから、直接水上レストランへ渡ることが出来、それを物見遊山の船に乗り換えて楽しむことも出来た。これはまさにバンコクやヨーロッパでも水際にありそうな風景です。こうした水上レストランは、日本ではなかなか出来ません。しかし、かつてはこのような風情がありました。

また道頓堀にあった旅館では、道路側から見ると川べりのところに座敷が張り出していて、なおかつ建物の真ん中から川に下ることが出来て、船に乗って遊ぶことも出来た。このように川に接した宿泊施設やレストランが、大阪独特の光景を作っていたということがわかります。

明治の頃に川べりに「多景色楼」という非常に見晴らしのいいレストラン、料理旅館がございました。ここからの眺めはとて大阪の風景とは思えません。川に迫り出すように、また誰もが川岸に下ることができる。そして、何処にでも船が着くことが出来る。こういう水と町の関係性が、かつて日本の都市にはありました。これを近代化の中で我々は忘れて来たと思います。

今大阪では、何とかこの景色を回復したいと、私が全体の規制緩和の会長をしております。今回のイベントでは、北浜テラスという堤防の上に張り出して食事出来る店が認められました。今は、広島の大田川と大阪だけで認められております。これがうまいけば、日本全国で認められていきます。当然災害が起こらないように治水をしっかり見たうえで、認める場所が決められています。

大阪の中之島では、もう一店川に接したレストランとショップが来年3月の正式オープンに向けて、準備中です。店のテラスが堤防よりも川の中にあって、川と接して飲食店やレストランをつくるのが、緩和を受けて、できるようになりました。写真だけを見ますと、とても大阪とは思えない。アメリカかヨーロッパの川岸の風景だと思われる方が多い写真であります。大阪には、今こういう風景が何箇所か順



らけだ」と言っているような映像も、当時はこれが産業観光だったのです。わが町は素晴らしい工場地帯だと言いたかった訳です。

一方、映像には、当時の名所であった大阪のある河川に瀬戸内海の方へ向かう帆船がたくさん停留している風景や、当時まだたくさんおられた船で暮らしている方々の非常に貴重な映像も出てきます。

大大阪のプロモーションとして作られたこの映像は、港を含めて川をぐるりと回った後、都心部の船着場に着きます。するとそこに観光用の市営のバスが待っていて、すぐに乗り換えて市内・陸の遊覧になります。日本の場合、川の船着場と駅やバスのターミナルが、うまく連結されているところはあまりありません。この時大阪市は、かなりバス停と船着場をうまく組み合わせるような事業をしていました。これは昭和 12 年ですが、間もなく戦時体制に入り、このような大阪の水を活かしたツーリズムは僅かな期間で終わってしまいます。ですから、仮に戦争が起こらなければ、水辺の本当に素晴らしい観光ルートは、まだ大阪の現在につながる 1 つの資源になっていたと思います。

大阪のアクアツーリズムと都市の誇りの再喚起

今申し上げたように、大阪では歴史・文化をもう一度再発見しながら、多くの市民の方々が自らの町を誇りに思い、わが町を案内するような新たなツーリズムの動きがあります。

その中のとても大事な軸として、都心部の川、水辺が注目されております。冒頭も申し上げましたように、私はアクアツーリズムに限らずツーリズムというのは人々が移動する、あるいは他から来る方を迎え入れることで、新たな何か素晴らしい社会が生まれるきっかけとなるものだと思います。

大阪においては、川や水に接する市民の方の思いをなるべく集め、各地で行われている実践を都心部の川沿いに集め、それを元に町の物語をもう一度魅力的なものに描きなおし、地域の方の誇りをもう一度呼び覚まし、外部の方から見た大阪への憧れをもう一度立ち現せる。そういう試みを今年から始めました。今後とも展開、継続をしていこうということで、声をあげております。

これは大阪の事例ですが、誇りの再喚起し、憧れを高めることは、世界のどの町にも通じる大事なコンセプト、考え方ではないかと申し上げたいと思います。

ご清聴、ありがとうございました。

